
BLOOD COLLECTON

ほとんど

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

B L O O D C O L L E C T I O N

【Nコード】

N 6 1 9 0 C

【作者名】

ほとんど

【あらすじ】

事故で母親を亡くした少女、サチ。母親が死んだのは父親の不注意のせいだと言い、家を飛び出す。暗い路地を歩き続け、コレクシヨンハウスという看板のついた店にたどり着くが・・・

第一話・コレクション・・・ではなくて・・・（前書き）

警告・この小説内には暴力的な表現、グロテスクな場面などが存在します。体調に変化などがある場合、すぐに観覧を中止してください。

第一話：コレクション・・・ではなくて・・・

今から十数年前、一つの家族が悲しみに包まれた。

「お母さん！お母さん！なんで返事してくれないの！」

雨の中、冷たくなって動かない母親に泣きついて一人の少女と、どうしたらいいのかわからずただあわてている父親。道路の真ん中で車が原形をとどめていないほどにつぶれてひっくり返っている。

「と・・・とりあえず救急車を呼ぼう！サチ！じっとしているよ！」

「お母さんは・・・動かないの？」

「大丈夫だ！きつとお父さんが助けてみせる！」

そして現在・・・。

「サチ、いつまで部屋にいるんだ。夕飯出来たぞ、降りてこい」

階段を静かに下りてきたのは、髪の高い色白の女性。もう二十歳をすぎているのか、身長も大人と同じくらいだ。

「な、なんだ、まだ母さんのことで父さんに不満があるのか」

「ごちそうさま」

「ぬ・・・おい、全然食べて無いじゃないか。それにそろそろ家になんか居ないで少しは自分で仕事でもして一人で・・・」

「うるさい！」

家の中がしんとなった。しばらくして父親が、

「まったく・・・毎日毎日・・・文句があるならこの家から出ていってもらっぞ！」

「ああ！いいよこんなバカ親父のいる家なんてまっぴらごめんだよ！」

するとその女の人、いちもくさんに外へと飛び出していってしま

った。

「あ！コラ！待ちなさい！今は冗談だ！戻ってこーい！」

女はそんな声に聞き耳を持たず、ものすごいスピードで駆けだしていった。

この女はサチ。幼い頃に母親を亡くし、父親と一人で暮らしていた。

「けっ！いいいいいよ！働けばいいんだろ！働いてやるよ！」

家を飛び出したサチ。行く当てもないのにただ走り続けていた。

サチはいつの間にか暗い路地裏に来ていた。働くあてもないのでそのまま歩き続けることぐらいいしかサチには出来ない。

「今日どこで寝るんだよ・・・」

サチは自分の中でこれからの出来事につっこみをいれながら歩いていた。

どれくらい歩いていたのだろうか、サチはもう疲れ果てていた。

ヨロヨロになっても歩き続けるサチは、死んでしまうのかと思うくらいに暗く、不気味になっていた。

「ハア・ハア・・・なんだよこの道・・・同じ道歩いてるみたいでなんにも見えないじゃねえかよ・・・」

サチはその場に座り込んだ。このまま死ぬの？そんなのイヤに決まってる。でもサチには、

「お母さんに会いたい・・・」

死んだ母を思い出すと、死ぬのも悪くはないかなと思ってしまふのであった。

「寝むったら死ねたらいいのに・・・」

死ぬのは怖くない・・・お母さんに会えるなら・・・
そのままサチは、いつの間にか眠ってしまった。

どのくらいたったのであろうか・・・何時間か、何日か・・・
「ん・・・朝・・・？」

でも朝とは思えない暗さであった。

「なんだ・・・」

サチは少しがっかりした。天国に行けば楽になれるというのに、自分が今いるのは苦しい現実世界だった。

「ん・・・？」

サチは背中に違和感を感じた。後ろに・・・なにかある・・・。サチはおそろおそろ振り向いた。そこにはなにかの建物があった。童話に出てきそうなお店だ。看板には赤い文字で大きくこう書かれていた。

『コレクションハウス』

「ん？なんだこれ・・・？」

サチは訳が分からず、とりあえずその店に入ってみた。

「ごめんくださーい。だれかませんかぁー？」

だれもいないのか、そう思っで振り返ると、

「いらっしやい」

「！？」

サチはもう一度振り返った。そこには背の小さいてる坊主のような体をした子供がいた。不気味な笑みを浮かべている。サチは少しゾツとした。

「あの・・・ぼく・・・このお店なんのお店？」

「売り物はありません」

聞いてサチはさらに訳が分からなくなった。これはなにかの夢なのかな？そう思っでほっぺをつねってみた。

「痛い・・・現実なの？」

「それでは当店について説明いたします」

店の子供はサチを見上げながら突然説明を始めた。

「この店には私の指定する物をたくさん持ってきてもらいます。そして持ってきた人に金を渡すというものです」

サチは、一応ここが働けるところだというのは見当がついた。

「ここで・・・働いていいの？」

「はい。もちろんです」

そしてサチはもう一つ聞いた。

「お給料は・・・？月給？それとも時給？」

「持ってきた品物によってその場で支払われます」

これはいいんじゃないか？サチは少しこの店に興味を持った。ん？でもなにを持ってくればいいのか・・・？それを聞いてから店の子供に話をすることにした。

「ねえ、このお店、特になにを持ってくればいいの？」

「動物の血だけです」

店の子供は小さく口を開いた。

「え・・・？血？」

「はい。血の量と種類によって値段が異なります。特に・・・」
特に・・・？なんなのだろうか。

人間の血は高値で売れますよ。

サチは聞き耳を疑った。人間の・・・人の血・・・？

「動物の血はせいぜい100円程度ですねえ」

サチは、前にいる子供が残酷な悪魔のように見えた。

「特に格別なのは、あなたの憎んでいる人の血です」

憎んでいる人・・・憎んでいる・・・恨んでる・・・大嫌いな人・・・

「そ・・・それってまさか・・・」

「では血を採ってきてもらいます。麻酔銃をお持ちになってください」

いきなりライフルのような物を持たされてとまどいを見せるサチ。

「こんなのどうやってやれば・・・」

「薬弾を入れて引き金を引くだけ、簡単でしょう？」

「こんなの持ってたら捕まっちゃうよ・・・」

サチはいつの間にかこの店で働いていた。知らず知らずのうちに・・。

「その心配はありません。店の扉を開けて外に出ると、そこはもうあなたの憎んでいる人のいる家です」

本当なのか。サチは扉を開けた。見慣れた風景が広がっていた。ここは・・。

「家の居間だ・・。」

「さあ、ここに人は住んでいますか？」

「父さんだけが・・。」

「ではそれがあなたの仕事です。さあ、眠らせてこっちへ持つてきてください」

父がいる。新聞を読んでいるようだ。サチは銃をかまえた。撃つていいのか？ いいよ。こんな父親・・・・・どうにでもなってしまう！

プシュツ

注射器のような細長い弾は、まっすぐに父の方へ飛んでいき、そして深く首に突き刺さった。父はその場で倒れ、そしてサチはガクガクとふるえ出す。

「どうしました？ はやく撃つて終わらせて下さいよ？」

「は・・はい・・。」

サチは父の体を引きずりながら持つてきた。

「ほう、これはいい血が採れそうですね。少々お待ちください、ただいま集計しておりますので」

店の子供は普通の子供となんの変わりのない顔で軽くそう言っていた。

しばらくして、店の子供が出てきた。

「あなたのお父さんはあまり売れませんねえ。お返しします」

子供が引きずってきたのは皮と骨だけになったサチの父親だった。

「キ・・キャアアッ！！」

サチは驚きと恐怖によってその場で腰を抜かした。

「どうしました？血を抜いただけですが」

「イヤ！こっちに持ってこないで！」

サチはその場にうずくまって泣き叫んでいる。

「しかたないですね・・・」

店の子供は死体を投げ捨て、サチのそばに歩み寄った。その顔には少し困ったような表情も浮かんでいた。

「いいですか、君のお母さんは交通事故で死んだではありません」

「じゃあ・・・なんだってのよ！」

「それは・・・」

沈黙が続いた。そのあとで子供が言った言葉はあまりにも衝撃的な物だった。

「あなたのお母さんは殺されたんです」

え・・・・・・

なんだって・・・？

耳に聞こえたのは、空間を切り裂くような一言。信じられない。お母さんが・・・

「ふ・・・ふざけるな！母さんが殺されるようなことをするはずがない！あんたの言ってる事はデタラメだ！」

「ウソじゃありませんよ」

「証拠はどこにあるのよ！」

「・・・・・・」

店の子供は少し黙って、思い切ったようにこう言った。

「ど・・・どうしても知りたいのなら・・・この店の地下室に行ってみてください」

ちかしつ？あー、たしかにこういう店にはありそうな物だ。

「な・・・なんで？」

「行けば分かります。ただし身の保証はしませんよ・・・」

サチは背筋が凍り付いた。なんなの？怪物か、それとも悪霊か？は

たまた毒ガスでもまき散らしてあるのか・・・とにかくもうこんな怖くて苦しくて悲しい思いをするのはうんざりだ。サチは率直に断った。

「いいのですか？最下層に行けばあなたのお母さんの秘密が分かりますよ？」

信じられなかったが、冗談抜きで次々とんでもないことをしている子供の目を見れば確かにウソではないような気がしてきた。そしてサチは行く気も失せていたのに、

「麻醉銃をちょうだい」

子供にこう言った。

「あなたはこの店に来て恐怖を感じたはずです。そして間近で父親の死も見た。それに自分が罪を犯してしまったことに深く後悔して・・・」

「後悔なんてしていないわ」

サチの言葉は子供の言葉をかき消した。

「これで自由の身・・・もうなににも振り回されない、縛られない・・・あなたのおかげなのよ。後悔どころか、自分とあなたに感謝しているくらいよ」

「そうですか・・・」

子供は少しうつむいて麻醉銃をサチに渡した。それからこう言った。

「どうか・・・ご無事で」

サチはうなずいた。この地下室に何があるのか・・・サチはこれが生涯に残る冒険や名誉になろうとは知る余地もなかったのである。

第一話：コレクション・・・ではなくて・・・（後書き）

結構長くなってしまつて申し訳ありません。二話では展開を少し早めていきます。少しでも読み込んでいただけたら幸いです。

第二話：ゾンビの迷宮（前書き）

前回でも書いたとおり、今回は無駄な会話などを少なくして少し展開の進むスピードをアップしていきたいと思います。ここからはミステリーな文が含まれるようになりますがご了承ください。

第二話：ゾンビの迷宮

「・・・つと・・・危ないなあ・・・」

サチは暗い階段を下りていた。どこまで続くのか、下が見えない。らせんじょうの階段なのになぜかまっすぐ歩いているような気がする・・・。

「なんだよ・・・扉を開けたらいきなり階段だもんなあ・・・」

あの子供・・・いったい何者なのか。こんな複雑で不思議な店を持っているなんて普通の大人でもないよ。そうつつこみたいが、誰もいないのでしかたなく独り言で済ませてしまうサチ。こんなに怖いのはうんざりだったが、今は子供の言うことを信じるしかないのだ。

地下室の階段を下りはじめてから、もう1時間以上も経っているというのに・・・いまだに中間地点のような所はなく、ただただ降りていくしかないのだった。

「ふう・・・まだかな・・・もうかなり時間が経ったと思うけどなあ・・・」

するとサチの考えに答えたのか、やっと広い部屋に出た。だが相変わらず中は暗く、音も届かないような空間だった。

「あーあ・・・なんでこんな所に来たんだろう・・・」

あんまり問い詰めたくなかった。自分の母親の死の原因を探るために来ているのだが、むろん、そんなことは考えたくない。と、その時！

「サチさん！調子はどうですか？」

「ひっ！？」

サチは身震いした。店の子供の声が聞こえてきたのだ！

「ぎゃああっ！！怨霊だあああっ！！」

「ちょ・・・落ち着いてください！オバケじゃありませんって！」

よく考えたらオバケなんているわけない。

「あり？なんでここまで声が聞こえてくるの？」

「いまあたりをつけます・・・っと・・・」

いつせいに部屋の周りの口ウソクが青白く燃え上がった。

「うわ・・・」

サチの目はその明るさに思わず反応し、閉じてしまった。しばらくして目を開けてみる。見てみるとそこは暗く冷たい階段でもなく、広い洋間だった。近くにはツボやシャンデリアなどもある。

「どうです？でもここまでしかわたしは行けないんですよ・・・ここから先は私が血を採った人間がゾンビになつてさまよっていますから」

え！？

「マジ？」

「マジです」

「ゾンビってたしかあの・・・人間が蘇った生きている死人ってやつ？やだやだ！そんなと庫絶対に行きたくない！」

「だからそのゾンビに対抗する武器を持ってきました」

すると声が聞こえてくる穴の横にまた穴があった。そこからピストルらしきものが出てきた。一緒に弾の入ったケースも3個。

「これで戦えつてこと？」

返答無しにまたなにかが出てきた。こんどはショットガンか？

「持ちにくいな・・・」

最後に変な箱が出てきた。鍵がかけられているようで、力ずくで開けよとしても開かなかった。

「おーい、この箱なんなのー？」

しかし返事がない。おかしい。もう1度叫んでみようか？

「おい！って言ってるだろが！」

しかし何度叫んでも返事どころか物音すら聞こえない。なにかあつ

たのか？サチはうつすら不安の色が顔に表れ始めた。と同時に、ものすごい音がした。

$$\dots TTTT \dots$$

「なに……この音……だんだん近づいてくる……？」

音は階段から聞こえてくる。だんだんと大きくなっていくその音は、サチに耳に大きく響くほどまでに近づいてきた。

「なにか来る……!？」

悪い予感がした。サチはとりあえず近くにあったクローゼットに入
って隠れた。

$$)T \cdot \cdot \cdot T T T T T T T T$$

音が急にやみ、今度は違う音が聞こえてきた。でもこれは音じゃない。明らかに生き物の発する鳴き声だった。

ゲゲゲ・・・ケケケ・・・ググルルル・・・

聞いたことのない鳴き声にサチは恐怖を覚えた。

「なんなのかしら・・・」

サチはクローゼットの扉を少しだけ開けて見てみた。

「なにあれ！？人・・・じゃないよね！？」

サチが見たのは、人の身長はあるが目が真つ黒で牙の生えている生物・・・まさにゾンビとしか言いようがなかった。3匹ほどいた。出ていったら間違ひなく殺される・・・。

「ええ！？なんで階段から下りてきたの！？と……とにかくどうかここを開けませんように……」

しかしサチはこんな時にドジをふんでしまった。クローゼットの扉を全開に開けてしまったのだ！

ゾンビ達がいつせいに振り向く。こつちにやってくる。

「う・・・そ・・・私死ぬの・・・？」

その時、サチは手元に店の子供のくれたハンドガンがあるのを思い出した。

「よ・・・ようし・・・くらえ!!」

ズガンッ!!

弾はゾンビの脳天に直撃した。

「ギキエエッ!!」

1体のゾンビが悲鳴を上げて倒れ込んだ。血は流さないが、死んでいることがサチには分かった。

「お!1発で!?!よし!残りも倒してやる!!」

ズガガンッ!!

ゾンビ達はサチの見事な早撃ちになすすべもなく死んでいった。というかもともと死んでいるのでは・・・?

「ふう・・・危機一髪ってところね・・・最後の1匹がやけに小さいけど」

でもゾンビ達は戻る階段を壊してしまってもう後には戻れない。先に進むしかないのだ。

「あの子供・・・どうしちゃったのかしら？」

気にせずサチはさらに地下へと続く階段を下りていった。

しかしサチは気づけなかった。あのゾンビの3体のうち身長の小さい1体はあの店の子供だということを・・・。

第二話：ゾンビの迷宮（後書き）

第3話は冒険ものになると思いますが・・・よろしくおねがいします
^^；

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6190c/>

BLOOD COLLECTON

2010年12月10日17時16分発行